第９回鞠智城フォトコンテスト 特別賞「お母さんと鞠智城」織田詠葉

第12回

鞠智城跡「特別研究」成果報告会

発表レジュメ集

日時　令和6年（2024年）
3月10日（日） 12:50～17:00

場所　**熊本大学工学部百周年記念館**

主　催　熊本県教育委員会・国立大学法人 熊本大学
後　援　山鹿市教育委員会・菊池市教育委員会・熊本日日新聞社・熊本放送
熊本県文化財保護協会・菊池川流域古代文化研究会・肥後古代の森協議会

九州・沖縄から 文化力 POWER OF CULTURE

第12回
鞠智城跡「特別研究」成果報告会

日　　時	令和6年（2024年）3月10日（日）（12：50～17：00）
会　　場	熊本大学工学部百周年記念館
主　　催	熊本県教育委員会・国立大学法人 熊本大学
後　　援	山鹿市教育委員会・菊池市教育委員会・熊本日日新聞社・熊本放送 熊本県文化財保護協会・菊池川流域古代文化研究会・肥後古代の森協議会

日　　程

12:35	オープニングイベントころう君出演
12:50	開会あいさつ　熊本県教育委員会教育総務局長　井藤和也 来賓紹介
13:00～13:30	報告1　植田喜兵成智氏（早稲田大学文学学術院講師） 「七～八世紀における新羅の「築城」記事にみる軍事的動静 ―日本古代山城の変化と国際的背景の関係についての試論―」
13:30～14:00	報告2　小嶋篤氏（九州歴史資料館技術主査） 「国造軍と鞠智城」
14:00～14:15	休憩
14:15～14:45	報告3　柴田亮氏（岡山大学文明動態学研究所助教授） 「鞠智城と菊池川中流域の地域社会との関係解明を目的とした考古学的研究」
14:45～15:15	報告4　古内絵里子氏（福山大学人間文化部講師） 「古代日本における山城の支配構造-総領制との関係から-」
15:15～15:30	休憩
15:30～16:00	講評：小畑弘己氏（熊本大学大学院教授）
16:00～16:30	講評：佐藤信氏（くまもと文学・歴史館館長　東京大学名誉教授）
16:30～	閉会行事

七～八世紀における新羅の「築城」記事にみる軍事的動静
―日本古代山城の変化と国際的背景の関係についての試論―

植田　喜兵成智

本稿は、新羅の「築城」記事を分析することで、7世紀から8世紀にかけての新羅の軍事的動静について明らかにするものである。この分析を通じて、当時の東アジアの国際情勢と新羅の軍事動向がどのように関連しているのかを整理できるだろう。また、新羅の「築城」記事および軍事的動静を検討することは、同時期に築造された、鞠智城をはじめとした、日本の古代山城を理解するうえにも有益であると考えられる。

従来、日本の古代山城建設は、白村江の敗戦後、唐や新羅からの攻撃を警戒して建設されたものと考えられてきた。第一義的には、そのような目的のもと建設されたと理解してよい。しかし、670年代には新羅と唐の対立が深刻化しているように、白村江の戦いの直後に比して朝鮮半島情勢は大きく変化している。それゆえ、670年以降はすでに唐や新羅の攻撃に備えるという対外情勢ではなかった可能性が高く、激変する東アジア情勢をみすえた検討が必要である。

また『続日本紀』によれば、698年、鞠智城、大野城、基肄城が「繕治」されたという。660年代に最初に山城が建設されてから、すでに国際情勢が大きく変化したなかで修繕・改築されたこととなる。では、なぜこのような時期に古代山城が改築されたのだろうか。

そこでこれまで充分に注目されてこなかった新羅の「築城」記事とその軍事的動静に注目したい。新羅がどのような情勢で軍事施設を建設し、どのような軍事的戦略を構築しようとしたのかを明らかにする。これによって、日本の古代山城の築城、改築の背景やその変化についてもその外的要因とその関連性を明らかにできると考えている。

検討の結果、『三国史記』新羅本紀にみられる7～8世紀の「築城」記事は、当時の国際情勢に応じた新羅の軍事拠点建設の様子を示していた。対百済戦争、対唐戦争終結後の新羅の主たる戦略的関心が北方に移ったことは、「築城」記事から看取できる。この事実は、新羅が実際に倭（日本）への軍事的作戦を実行する可能性が低かったことを意味する。それゆえ、698年の「繕治」は新羅に対する防衛戦略とは別の目的で行われたものとみなすべきであろう。

七～八世紀における新羅の「築城」記事にみる軍事的動静
―日本古代山城の変化と国際的背景の関係についての試論―

早稲田大学文学学術院　植田 喜兵成智

はじめに

○ 本研究の目的

新羅の「築城」記事を分析することで、7世紀から8世紀にかけての新羅の軍事的動静について明らかにする。この分析を通じて、当時の東アジアの国際情勢と新羅の軍事動向がどのように関連しているのかを整理する。また、新羅の「築城」記事と軍事的動静を検討することは、同時期に築造あるいは改築された、鞠智城をはじめとした、日本の古代山城を理解するうえにも有益である。

○ねらい

従来説:白村江の敗戦後、古代山城は唐・新羅の侵攻に備えるために建設

→670年代以降、新羅と唐は対立して戦争状態になるように朝鮮半島・東アジア情勢は変化

⇒690の鞠智城、大野城、基肄城の「繕治」はいかなる情勢下のもとで行われたのか?

⇒⇒新羅の軍事的動静を詳細に検討　※分析対象として新羅の「築城」記事に注目

1　問題の所在

(1)共通理解の確認

○日本の古代山城関連記事

『日本書紀』天智3年(664)条

是歳。於対馬・壱岐島・筑紫国等、置防与烽。又於筑紫築大堤貯水。名曰水城。

『続日本紀』文武2年(698)5月条

甲申(二十五日)。令大宰府繕治大野・基肄・鞠智三条。

『続日本紀』大宝元年(701)8月条

丙寅(二十六日)。廃高安城。其舎屋・雑儲物移貯于大倭・河内二国。

『日本三代実録』元慶3年(879)3月条

十六日丙午。(略)又肥後国菊池郡城院兵庫戸、自鳴。

→663年の白村江の戦い以後に築城　→698年に改修・701年以降に廃止記事

→8～9世紀、大野城、鞠智城などの記事　→9世紀後半に鞠智城の最後の記事

○戦後の日本の文献史･考古学

通説:白村江の敗戦後、唐･新羅と対立した国際情勢の悪化のなかで建設

→国際的緊張感が弱まると廃止　→　一部は他の目的に転用=機能･役割の変化

……山城築造白村江以前説　在地首長関与説　地方支配拠点説　九州地方勢力牽制説

考古学の成果などから山城の規模や役割の変化などが明らかになりつつある

⇒ミクロな視点での古代山城の築造背景に関してはおおむね賛同

⇔山城の建設に関する国際的背景については、通説的理解が依然として根強い

問題点①:新羅側の視点の欠如

問題点②:7～8世紀の東アジアの国際情勢とその変化に対する理解不足

(2)近年の対外関係史の視点からの研究と問題点

熊本県所在の鞠智城を中心に検討が進展

柿沼亮介……対外関係史。外交機能。地方豪族の外交を牽制する機能

⇔新羅の視点が充分に反映されていない

新飼早樹子……新羅の情勢に注目。8世紀に張保皐･海賊の横行に対応して機能変化

⇔7世紀の情勢理解についてはややステレオタイプ

近藤浩一……韓国の山城(二聖山城など)の構造と比較し、鞠智城の機能理解

⇒新羅との交流の観点から、新羅の山城からの影響を指摘

→新羅の視点、朝鮮語の文献や韓国側の考古学的研究成果も考慮される

⇔諸論考においてもその視点、分析する対象と参照する先行研究に偏りがあると思われる

問題点③:韓国の文献史側からの山城･土城研究を充分に検討できていない

問題点④:7～8世紀における新羅の軍事動向について検討されていない

(3)韓国学界の研究と問題点

考古学分野

……個別の山城、土城などの発掘成果が報告　→日本の山城研究にも影響

文献史分野

……城の位置比定…地理志と考古学成果に基づいて城と名称を推定

軍事史的観点…新羅の軍事防御体制を推定

社会史･政治史的観点…県城など行政拠点･祭祀の対象としての山城

→新羅の「築城」背景を分析し、その目的や防御網を推定。山城の役割･機能も分析

⇒あくまでも韓国国内の研究成果に依拠し、史料も新羅関連のものを中心に利用

問題点⑤:日本の古代山城との比較という視点は無い

問題点⑥:7～8世紀という通時代的な視点はあまり見られない

⇒⇒新羅の「築城」記事を網羅的に分析し、新羅の軍事的動静について整理する

2 「築城」記事と城の所在地

(1)670年代以前

【史料A】『三国史記』巻4・新羅本紀4・真平王48年(626)条　※以下「羅紀」と省略

築高墟城。

【史料B】羅紀5・武烈王3年(655)条

三年。金仁問自唐歸、遂任軍主、監築獐山城。

【史料C】羅紀6・文武王元年(661)9月条

築熊峴城。

【史料D】羅紀6・文武王3年(663)春正月条

三年春正月。作長倉於南山新城。

【史料E】羅紀6・文武王3年(663)春正月条

築富山城。

(2)670年代

【史料F】羅紀7・文武王12年(672)8月条

築漢山州晝長城、周四千三百六十歩。

【史料G】羅紀7・文武王13年(673)2月条

二月。増築西兄山城。

【史料H】羅紀7・文武王13年(673)8月条

増築沙熱山城。

【史料I】羅紀7・文武王13年(673)9月条

九月。築國原城①(古亂長城)・北兄山城②・召文城③・耳山城④・首若州走壤城⑤(一名迭巖城)・達含郡主岑城⑥・居烈州萬興寺山城⑦・歃良州骨爭峴城⑧。

【史料J】羅紀7・文武王15年(675)9月条

縁安北河設關城。又築鐵關城。

【史料K】羅紀7・文武王19年(679)8月条

増築南山城。

(3)680～690年代

【史料L】羅紀8・神文王7年(687)秋条

秋。築沙伐・歃良二州城。

【史料M】羅紀8・神文王9年(689)秋閏9月26日条

秋閏九月二十六日。幸獐山城、築西原京城。

【史料N】羅紀8・神文王11年(691)条

築南原城。

【史料O】羅紀8・孝昭王3年(694)冬条

冬。築松岳①・生岑②二城。

(4)720年代

【史料P】羅紀8･聖徳王12年(713)12月条

築開城。

【史料Q】羅紀8･聖徳王20年(721)7月条

二十年秋七月。徴何瑟羅道丁夫二千、築長城於北境。

【史料R】羅紀8･聖徳王21年(722)10月条

築毛伐郡城、以遮日本賊路。

(5)760年代

【史料S】羅紀9･景徳王21年(762)5月条

二十一年夏五月。築五谷①･鵂巖②･漢城③･獐塞④･池城⑤･徳谷⑥六城、各置太守。

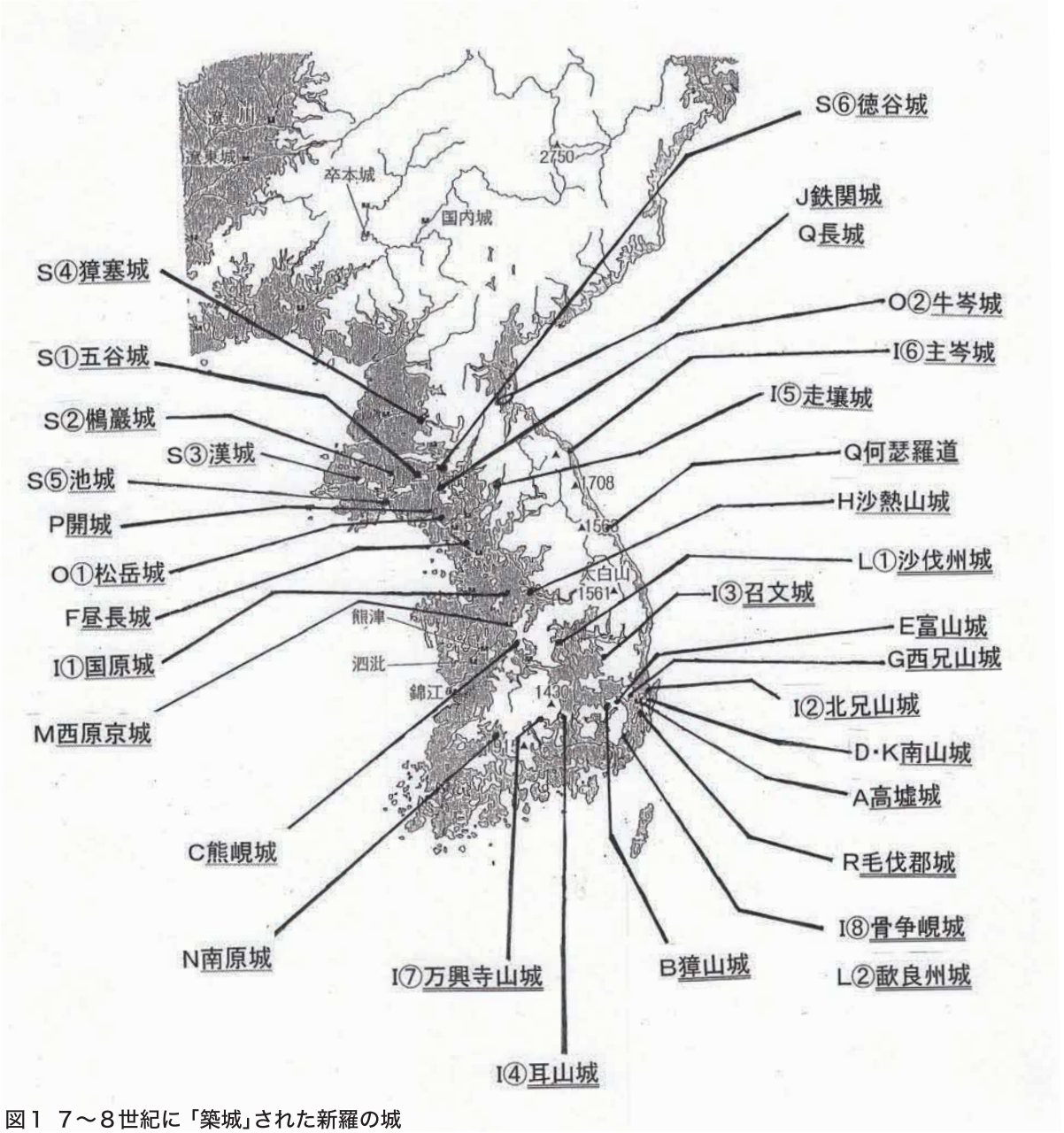


図１　７～８世紀に「築城」された新羅の城

3　新羅の軍事動向とその変化

＜記号の意味＞

　○○城…新羅王都周辺のもの

　○○城…三国統一以前より新羅の領域だったもの

　○○城…旧百済・高句麗領内だったもの

(1)670年代以前:王都防衛と百済攻略

660　百済滅亡　663　白村江の戦い　668　高句麗滅亡

A高墟城…例外。王都付近　⇒王都防衛

B獐山城…王都から百済への要衝。百済との抗争中　⇒王都防衛

C熊峴城…百済の旧都・熊津付近。百済遺民との抗争中　⇒百済方面への拠点

D南山新城・E富山城…王都周辺。百済遺民との抗争中　⇒王都防衛

(2)670年代:羅唐戦争期の軍事拠点

670　高句麗遺民蜂起　670～676　羅唐戦争

　☆672.8 石門の戦い　☆678　新羅再征討計画中止　☆679　四天王寺完成

F昼長城…現在の南漢山城。唐軍に敗戦直後　⇒漢江の防衛拠点

G西兄山城・I②北兄山城…王都周辺の山　⇒王都防衛

I③召文城・I④耳山城・I⑦万興寺山城…王都の西側。唐軍侵入路　⇒王都防衛

I⑧骨爭峴城…王都の南側。南からの進入路　⇒唐からの王都防衛　※倭軍ではない

H沙熱山城・I①國原城…西海岸。旧百済領　⇒唐の西側進入路の防衛

I⑤走壤城・I⑥主岑城…東海岸。旧高句麗領　⇒唐の東側進入路の防衛

J安北河関城・鉄関城…東海岸。戦争末期　⇒唐の東側進入路の防衛

K南山城…王都付近。戦争終結後　⇒王都防衛

(3)680～690年代:唐との没交渉と地方支配の拠点

681～692　神文王代　690～705　武周期　690年代　北進と羅唐交渉再開　698　渤海建国

L沙伐・歃良…王都の南と西北。「州城」　⇒行政的な拠点

M西原京城・N南原城…九州五京　⇒地方支配の拠点

O①松岳・O②牛岑…臨津江の北方。羅唐戦争主戦場より北　⇒北進

→朝鮮半島では新羅の支配が地方にまで波及し、安定化した状況

⇒新羅と友好的な倭の立場からすれば、朝鮮半島に対する警戒を解く方向へ転換?

(4)720年代:渤海の隆盛と日本への警戒

698　渤海建国　705　唐再興　☆703　新羅・唐関係回復　∴以降、連年遣使

　☆732前後　新羅・倭(日本)関係の悪化

P開城…西海岸　⇒北進

Q何瑟羅道…長城建設。東海岸　⇒北進

R毛伐郡城…722年。倭(日本)の侵攻に備えて建設　⇒対日本の防衛拠点

⇒698年の大野城、基肄城、鞠智城の改築の背景は?
⇒⇒可能性①:7世紀末からの東アジア情勢変化に備え、倭(日本)側が軍事拠点を再整備
⇔安勝の高句麗国の存続と廃止(670〜683)　∴倭(日本)との関係
可能性②:軍事的緊張緩和にともなって別機能に転換するための再整備
【史料】『三国史記』巻8・新羅本紀8・孝昭王7年(698)条
三月。日本國使至、王引見於崇禮殿。
⇒「繕治」の同年に新羅王が日本の外交使節と会見している点に注目

(5)760年代:新羅の北進
782　浿江鎮典設置
S①五谷・②鵂巖・③漢城・④獐塞・⑤池城・⑥德谷…礼成江から載寧江　⇒北進
→これ以降、8世紀の新羅側の「築城」記事は確認できない
⇒倭(日本)に対する軍事拠点の建設が確認できるのはR毛伐郡城のみ
対百済・対唐戦争、北進など新羅の軍事的展開・防衛政策に関連して「築城」記事確認
⇒⇒新羅は対日本の防衛、あるいは攻撃する具体的な計画をもっていなかった

むすびにかえて—仮説と今後の展望
仮説①:『三国史記』所載の「築城」記事の史料的価値
7〜8世紀の「築城」記事…当時の国際情勢に応じた新羅の軍事的動静を示す
⇒新羅の「築城」記事が同時代の情勢を反映したものと理解できる　∴同時代性

仮説②:新羅の主たる軍事的関心
対百済戦争、羅唐戦争終結後において主たる「築城」は北方で展開
倭(日本)への軍事的作戦を実際に行う可能性が低い
⇒698年「繕治」の意味　⇒⇒対新羅の防衛戦略とは別の目的

課題・展望①:新羅との交流と山城の機能
7世紀後半の新羅と倭(日本)の友好的な交流関係 + 新羅の城の機能とそれとの類似性
⇒新羅の祭祀制度・地方制度と関連させて議論する必要

課題・展望②:東アジアの観点から山城・鞠智城をとらえる
鞠智城もふくめた古代山城については、日本国内に局限された視点では解決できない
⇒東アジアをはじめ世界史的な視野からとらえなおす作業が必要

国造軍と鞠智城

小嶋　篤

【要旨】

本研究では、「古代山城がどのような動員体系に基づいて、築城され、運用することを計画していたのか」という根本的課題を追究した。本課題を追究するには、各事象の年代特定が「歴史学」としての絶対条件である。そこで、まず古代山城研究の原点とも言える築城年についての最新研究を積み上げた。

鞠智城跡の調査研究を筆頭とする実証的研究成果の到達点・資料的限界を確認した上で、大野城跡出土土器の総量分析に着目した。国家が重視した第一段階古代山城に属する大野城は、古墳時代以前の集落・墓域と重複関係にない新規築城型古代山城である。このため、最古相の土器となる小田編年Ⅴ期(飛鳥時代後半・7世紀第3四半期)の須恵器が築城時期をより鋭敏に反映すると把握した。

第一段階古代山城の築城時期をより絞り込んだ上で、「倭政権の統治と外征」・「国造軍動員と労役」を検討し、文献史料と考古資料を突き合わせながら、国造軍の成立から終焉にいたる兵制史を整理した。第一段階古代山城築城の前段階(小田編年ⅣB期)にあたる孝徳朝下では、天下立評による軍事・労役動員方式の改変が見込まれるが、その痕跡は評衙遺跡としては確認できない。最も視認し易い痕跡が、各豪族による私的動員で築造されてきた大型墳であり、とくに国造軍(外征軍)動員路の収束地・駐屯地である壱岐島の大型墳築造停止(小田編年ⅣB期)が象徴的事象と評価できる。また、古墳・集落を含めた筑紫嶋の遺跡動態から俯瞰すると、百済の役と古代山城群の築城には、古墳時代後期より本格化した丘陵地開発・人口増加で蓄積してきた物資・人員が投入された構造となる。

『日本書紀』記載の「築・築城」が、古代山城の「築城開始」・「築城完了」のいずれを示すかは未決着であるが、第一段階古代山城の築城期間には「戦時」が含まれており、国造軍駐屯期間と重なる。平時とは異なる「戦時」での国境域における軍事施設整備には、駐屯中の国造軍も動員されたと見るべきで、新規徴発の労役と組み合わせて早期の築城が図られたと考える。そして、百済の役直後の防衛においても、国造軍(国造軍Ⅱ-2期)が古代山城群を軍事的に運用できる唯一の動員体系であったと結論できる。

国造軍と鞠智城

九州歴史資料館　大宰府調査班　　小嶋　篤

＜研究に至る過程＞

前提1:平成27年度特別研究「鞠智城築造前後の軍備」の成果

【築城期の鞠智城を構成する戦術的要素】

①朝鮮式山城の築造技術･律令的複合冶金工房等の**新来要素**

②古墳時代に醸成されていた地勢的理解･主要武装様式の踏襲等の**旧来要素**

⇒両要素が組み合うことで、鞠智城の戦術的防衛設計が成立している。

↓

前提2:令和2年度特別研究「火国の領域設定と鞠智城」の成果

【築城期の鞠智城を構成する戦略的要素】

①百済の役以降、倭政権（中大兄皇子称制政権）は、**戦時侵攻体制（国造軍）を対処的に改変して戦時防衛体制を構築**。

②筑紫嶋内陸部からの貢納･動員には、筑紫君･肥君等が開拓した南北路「筑紫縦貫道」が幹線路として機能した。**筑紫縦貫道は戦時防衛体制下で重視され、古代城塞群による閉塞がなされた**。

⇒鞠智城の築城･戦略的運用は、古墳時代後期に成立した国造制（国造軍）と連続する。

↓

＜研究課題＞

「古代山城はどのような動員体系に基づいて、築城され、運用することを計画していたのか」

1. 古代山城の築城時期

（1）文献史料上の古代山城

･『日本書紀』記載の古代山城築城記事は、すべて白村江の戦い以後であるが、記事の「築･築城」が、「築城開始を示す」と「築城完了を示す」のかは、未決着な研究課題。

･「築城→一部並行して、舎屋･倉庫などの建物、貯水施設などの造営→物資搬入→維持管理･修理→廃城により建物移築･物資移動→その後の使用･放置」という変遷例（高安城変遷モデル）。

（2）古代山城の年代論と鞠智城跡の調査研究

･考古学による年代決定では、各種資料に対する「層位論･型式論を組み合わせた相対編年の構築」を重視し、分析対象資料数を豊富に確保。

･資料的限界を克服できる数少ない古代山城が鞠智城跡であり、出土遺物の総量分析は、考古学的手法により導き出された堅実な研究成果として高い評価。

（3）古代山城未完成論と史料未記載古代山城

･国家･大宰府重視の古代山城（第1段階）から築城がはじまり、第2･3段階に史料未記載古代山城の多くが築城されたと理解できる（稲田2012）。

(4)大野城跡出土土器の総量分析

・古代山城の最密集地点が後の筑紫大宰府であり、古代山城群の中核施設が大野城である。

・城内の大宰府四天王寺(以下、四王院)創建経緯は『類聚三代格』宝亀五年(774年)三月三日官符に明記されており、774年以降の遺物には大野城と四王院の帰属遺物が複合する。

・**大野城跡・四王院跡出土土器の総量は、4,101点(九州歴史資料館所蔵品のみ)**にも及ぶ。

・四王院建立は宝亀五年(774年)であるため、大野城Ⅱ期(小田ⅦA期・八世紀前半)以前の遺物は基本的に大野城帰属遺物と見なしてよい。

・主城原地区出土須恵器群には、白村江の戦い(663年)前後に用いられた須恵器坏蓋(小田V期)が含まれる。**4,101点の土器に小田ⅣB期以前の土器が1点も確認できない点は重視でき、小田V期の遺物量が少ないとは言え、存在すること自体に高い資料的価値が認められる。**大野城築城記事と親和性が高い分析結果である。また、**外郭施設と内部施設出土土器に時期差がない点は、「高安城変遷モデル」とも整合する。**

・大野城跡は土塁や倉庫群が建設された尾根上に古墳時代集落・墓域が営まれていない**「新規築城型」であることから、最古相の出土土器(小田V期)がより鋭敏に古代山城築城時期(七世紀第3四半期)を反映していると評価できる。**

・整備期と評価できる大野城Ⅱ期は、繕治(698年)・筑紫の役(706～718年)と重なり、遺物量が増加する。整備が一段落した大野城Ⅲ期の遺物量は、大野城全体で減少する。

・**大野城と鞠智城の比較では、「繕治」・「筑紫の役」による土器量増加とともに、城庫多用期と見られる奈良時代(八世紀中頃)の土器量減少も共通する。**古代山城整備時には多くの整備資材・人員が城内に入るが、整備後の運用初期においては、城庫とその周辺は守衛対象として厳しく管理されていたと解釈できる。

2.倭政権の統治と外征

(1)倭政権から見た筑紫嶋

・「筑紫嶋」という島名は、土地認識として九州北部に大きく偏る。同現象には、飛鳥時代における倭政権の国家領域観が強く反映されており、筑紫・豊を中心として、その外縁域を火・日向に収斂する構造がうかがえる。

・本構造の起点には、宮がある畿内と韓半島南部を接続する「海西航路(瀬戸内海―響灘・玄界灘航路)」があり、同航路を幹線路として百済の役へといたる国造軍の動員、次いで古代山城群築城(防衛体制整備)がなされた。

(2)筑紫嶋におけるミヤケ・評の実態

・**比恵・那珂遺跡群(那津官家)の倉庫群は、六世紀後半(小田ⅢA期新相)を上限とし、七世紀第第3四半期(小田V期)を下限として機能**したと把握されている。現状ではミヤケ遺構は『日本書紀』宣化天皇紀の官家設置時期よりも後出する。物資搬入痕跡としては、古墳時代後期とされる牛馬歩行痕跡(比恵112次)や、壺・甕類に多く見られる搬入土器が挙げられる。

・**阿恵官衙遺跡(糟屋評衙)**は、古墳時代後期の前方後円墳・鶴見塚古墳の隣接地に営まれた官衙遺跡である。官衙域は東側に正倉、西側に政庁が配される。政庁は新旧二つの遺構が重複しており、**古段階の政庁は小田V期を上限**とする。

・**上岩田遺跡(御原・夜津評衙)中央の基壇建物は、天武七年(679年)の筑紫国地震により倒壊しており、679年以前の評衙整備が確定する。**基壇建物の瓦は大和・山田寺系に連なるため、山田寺創建年(643年)よりも後出することが確定でき、**出土土器の様相から小田V期**に位置づけられる。

・資料蓄積が進んだ結果、那津官家の終焉は、百済の役を経たI期大宰府政庁の成立と連続する蓋然性がさらに高まった。解明が進む阿恵官衙遺跡・上岩田遺跡の事例から見て、**筑紫嶋の評衙整備は小田V期を上限としており、孝徳紀の天下立評よりも百済の役後に画期がある。**

(3)ミヤケに繋がる道

・**ミヤケへの物資集積、労役・兵役の徴発を物理的に実現するものが交通路**である。筑紫国と火国(肥後)を南北に貫く「筑紫縦貫道」は、筑紫君・筑紫国造の本拠地である八女領域の開発・物流から、古墳時代中期後半以後、岩戸山古墳築造がなされた古墳時代後期前半が成立画期となる。

・筑前・筑後・肥前の境界となる三国丘陵(福岡県小郡市周辺)を対象に、弥生～飛鳥時代の遺跡動態を検討すると、古墳時代中期以前の集住地は丘陵裾にあり、古墳時代後期以後に丘陵地開発が本格化する。脊振山地側南北路が「鞍鞴尽しの坂」であり、筑紫神社を通過する長崎街道(三国坂)との道程重複が有力視できる。

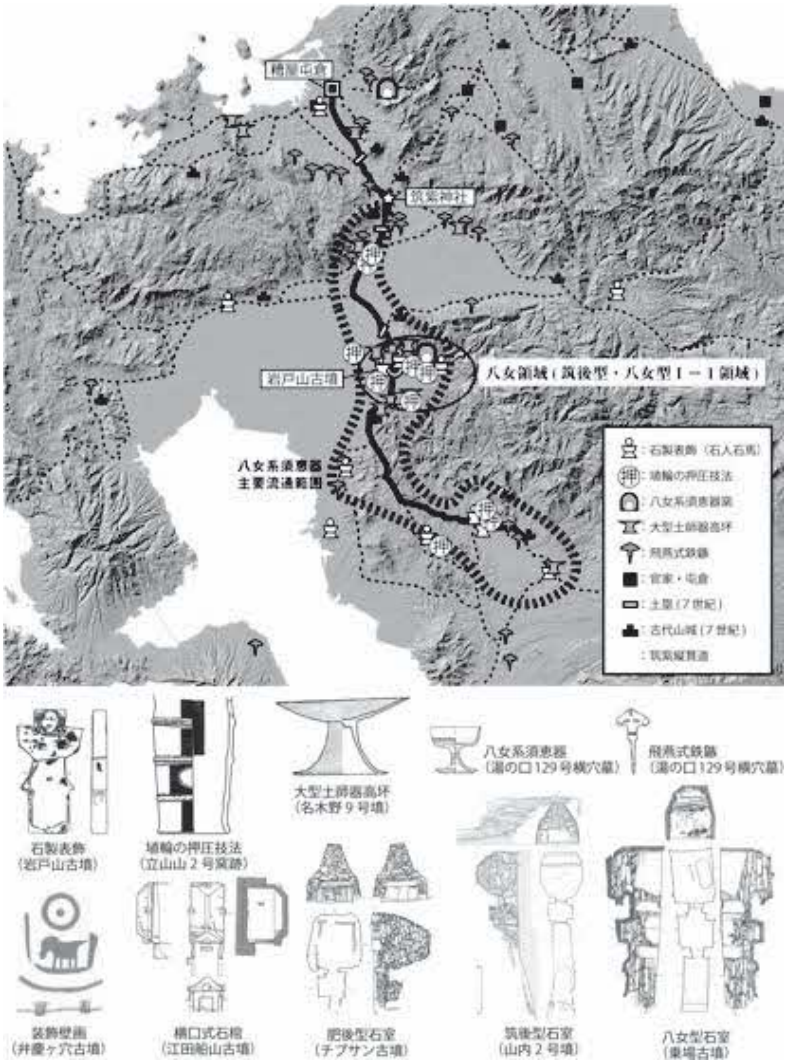
(4)筑紫嶋の外征軍動員路

・**「鞍鞴尽しの坂」が社会的に重要視された古墳時代後期～飛鳥時代は、百済の役を筆頭に、倭政権の主導により多くの人的資源・物資が韓半島に投下された時代**である。その中核を担ったのが筑紫嶋の諸豪族であり、「鞍鞴尽しの坂」を含む北上路が動脈の役割を担った。

・筑紫嶋の北上路は、遺跡動態を根拠として西側から順に、①九州西部航路、②松浦回廊(笹原峠越え)、③筑紫縦貫道、④遠賀川、⑤九州東部航路の五つの路にまとめられる。

・筑紫嶋北上路は、東は瀬戸内海航路を通じて大王の宮、西(北)は壱岐海峡・対馬海峡を通じて韓半島へと到達する。倭政権の政略的視点、動員路という視点に立てば、東の宮へは「上番・貢納」、西の韓半島へは「兵役」を第一義とした交通路となる。

・**壱岐島における大型古墳(対馬塚古墳等)・群集墳造営が小田IIIB～IVA期に集中する現象は、韓半島への軍事動員と連動する**現象として理解されている。



3. 国造軍動員と労役

(1)国造軍の命令系統・進軍方式・軍備

・国造軍の動員権限は、倭政権中枢の大王にあり、将軍に任命した皇族や物部氏・大伴氏等の中央豪族より、各国造に向けて「軍事目的・兵

数・集結地点・集結期日」等が示される。

・国造軍は、要請期日に間に合うよう集結地点に向けて進軍するが、本進軍の責任は各国造が担うことになる。進軍する際の航路（港）の利用や駐屯地の確保（水・物資補給）等の実務は、各国造の差配に依るところが大きく、国造軍の進軍は、古墳時代を通じて歴史的に培われてきた豪族間の協力関係が基層に存在する。

・**進軍路が集束する九州北西岸や壱岐島での港の利用・駐屯地確保を円滑に行うには、同地の諸集団を主導する豪族（壱岐島造等）との協力関係を個別に取り結ぶ必要**があった。

（2）豪族間の協力関係と古墳築造

・豪族間の協力関係は複数分野におよぶが、遺跡として我々が認識できる最たる痕跡が「古墳」である。古墳は上位階層墓となる大型墳ほど、遠隔地の要素や複数集団の要素を内包する頻度が高く、他豪族との接触・技術保有者の往来がなければ成立し得ない現象が頻発する。

・壱岐島を統率する壱岐嶋造も、島内に独自の中造墓秩序を小田ⅢB～ⅣB期という限られた期間に構築した。**島外からの人員・物資供給が短期間に集中する歴史的契機**とは、従前の指摘通り、韓半島への国造軍の派兵に他ならない。

・**古墳時代の軍事動員である「同族集団・部曲の動員」は、『古事記』・『日本書紀』で確認できる古墳築造動員体系と同一軸であり、労役と兵役が転化されやすい構造**であったことが記紀には記されている。

（3）壱岐島の古墳築造技術

・小田ⅢB期にはじまる壱岐島での大型墳築造は、対馬塚古墳を端緒としており、本墳の古墳築造範型が島内全域の群集墳にも投影されている。壱岐島の古墳を構成する基本軸は、九州在来の豪族により培われおり、同軸に家形石棺や利用石材の巨石化という畿内型石室の要素を組み合わせて成立する。

（4）国造軍進軍と古墳築造技術の共有

・壱岐島・九州北西岸を結節点とした古墳要素（三室構造・長羨道石室）は、瀬戸内海西端の重要拠点である京都平野をはじめ、筑紫嶋北部の複数集団で共有される。

・壱岐島の古墳築造における巨石運搬技術の発達も、豪族間の協力関係を媒介として、九州各地における畿内系要素の拡散を促進した見られる。

（5）孝徳紀天下立評の痕跡

・**軍事動員と古墳築造における動員体系の重複は、各豪族による軍事力・労働力の私的運用と直結する。むしろ、公的・私的という区別自体が未成立な動員体系であることが、古墳時代後期における国造軍の構成要素であった。**

・つまり、**壱岐島における大型古墳の築造停止（小田ⅣB期）は、倭政権による軍事力の私的動員抑止が最も鋭敏に反映された現象の一つ**と評価できる。

・豪族独自の大規模動員が抑止されたことで、地域の生活基盤を整備していた動員体系も変質せざるを得ず、氏族的結合・生活圏の基軸は維持しながらも、新たな社会秩序の形成（立評）が始まったと理解する。

・小田ⅣA期以前の盛んな造墓活動（新式群集墳）は各種武装を中心とする膨大な副葬行為を伴っていた。小田ⅣB期の造墓活動縮小により、動員・墓域制限だけでなく、副葬行為も縮小した。**制限法としての薄葬令は、列島規模で軍事物資の蓄積を図る契機になった**と理解できる。

・飛鳥時代に製作され、**律令期に引き継がれた大宰府備蓄兵器も小田ⅣB～V期の製品を上限**としており、薄葬令は兵器の長期保管・運用の転換点としても評価できる。

4. 国造軍の成立と終焉

(1)杖刀人と国造軍

・国造軍成立前における倭政権の確実な軍事組織は、埼玉稲荷山古墳出土金錯銘鉄剣から読み取れる「杖刀人首―杖刀人」である。

(2)I期国造軍

・筑紫君磐井の乱を経て、筑紫嶋でのミヤケ設置・国造制整備が進み、外征軍としての国造軍運用が始動する。

・I期国造軍では、要請された兵数に対し、各国造(豪族)単位で歴史的に培ってきた慣習法・人的結合に基づいた独自の動員方式を用いていたと考えられる。

・国造軍の動員では、『日本書紀』欽明一五年(五五四年)の百済・聖明王戦死後の窮地に「筑紫国造」が、新羅の包囲軍を破る奮戦が記される【国造軍I-1期】。**欽明一五年記事は韓半島の戦場における国造の初見史料であるが、比恵・那珂遺跡群の倉庫群出現時期と親和性が高い。**

・丁未の乱で物部氏が没落すると、上宮王家・蘇我氏が対外戦略を主導した【国造軍I-2期】。上宮王家・蘇我氏主導の対外戦略下で、筑紫嶋の統治機構は再編されていった。

・古墳時代後期は丘陵地開発が活発化し、潅漑機構の広域整備も展開する。小田ⅣA期(古墳時代後期後半)に人口増加が頂点を迎える。首長墓では前方後円墳墓制は衰退するが、古墳墓制自体はより広範に普及し、造墓活動(新式群集墳)にも多くの労働力が投下されていた。

(3)Ⅱ期国造軍

・評制の施行により、地方支配体制は「国造―評造―五〇戸造」に編成された(篠川1985)。**軍事動員も戸(徴兵単位としての五十戸制)を単位として、クニ内部の一律的負担となるよう改変されたが、部隊運用においては国造が引き続き指揮権を担う構造を維持した**【Ⅱ-1期国造軍】。

・天下立評の痕跡は「評衙遺跡」としては現れず、現象としては大型墳の築造停止(小田ⅣB期)が肯定でき、豪族の私的動員抑止が同時多発的に広域で認められる(制限法としての「薄葬令」)。

・「百済の役」では、古墳時代後期後半の開発地拡大・人口増加と、天下立評による労役体系・兵器消費と保管の改変を経て蓄えられた人的資源・物資が韓半島に投下された。同戦役では宮自体が筑紫に西下し、国造軍の動員・差配を担った【国造軍Ⅱ-2期】。

・百済の役直後に築城記事が集中する古代山城の威容は、『日本書紀』に記載された白村江の戦いの動員兵数約四万七千人に信憑性を抱かせる。古代山城のうち、水城・大野城は小田Ⅴ期に築城されたと判断でき、鞠智城も同時期に築城された可能性が高い。

・当該期における**大規模労役を可能とする動員体系は「国造―評造―五〇戸造」編成であり、同動員により筑紫に集結していたのが国造軍である。**

・宮自体が筑紫に西下した状態にあることから、一定数の守衛部隊が駐屯状態にあったと見る。また、白村江の敗戦を経て、帰国した国造軍を直ちに解散させたとは考え難く、帰郷に向けた部隊の再編成も兼ねつつ、唐・新羅の動勢を把握するまでは、対馬・壱岐・筑紫での駐屯を継続したと考えられる。

・百済の役・白村江敗戦直後の駐屯において、国造軍の筑紫集結期間は複数年に及ぶ。つまり、本兵役期間に古代山城の築城(労役)にも国造軍が動員されたことで、平時とは異なる「戦時」での短期間かつ大規模労役が可能になったと考える。

・筑紫縦貫道を軸とした第一段階古代山城群、とくに二日市地峡帯周辺の築城には、短期間に広域からの

労役徴発がなされたことを想定しないと、『日本書紀』記載の築城記事は成立し得ない。

・また、対馬という離島に位置し、城郭としての完成度が高い金田城の築城動員は、島外からの新規徴発に多大な労力がかかるため、対馬での国造軍駐屯期間に築城が開始されたことが有力視できる。・古代山城の築城技術には、新来の百済系土木技術（版築等）が用いられているが、近年の調査において、古墳築造技術の応用事例（天神山水城・前畑土塁）も確認されはじめた。具体的には、「土塊・盛土内層状被覆土・盛土傾斜積み・外皮盛土」の組み合わせであり、同土木技術は九州北部の古墳築造技術と直接系譜を有しており、同地での労役徴発を示す物証である。

（4）評造軍

・天武一二～一四年の国境画定事業「令制国の成立」により、国造制は廃止される。

・天武一四年の武器収公により、「大角・小角・鼓・吹・幡旗」の指揮具について私家（国造居宅）での保管が禁じられ、すべて郡家（評衙）に収めることが義務づけられた。**指揮具の収公を物理的に実現するものが評倉（評衙）であり、天武一四年には「遺跡」としての評衙の存在が確認できる。**

・国造制廃止・武器収公をもって、国造軍は終焉したと識別する。

＜本研究の結論＞

①新規築城型古代山城である大野城跡から出土した豊富な土器の総量分析に基づいて、第1段階古代山城の大野城が小田V期に築城されたことを確認した。

②筑紫における第1段階古代山城の築城期間（小田V期）は、「戦時」が含まれており、国造軍駐屯期間と重なる。平時とは異なる「戦時」での軍事施設整備には、駐屯中の国造軍も動員されたと見るべきで、新規徴発の労役と組み合わせて早期の築城が図られたと考える。

③国造軍【国造軍Ⅱ-2期】が百済の役における投入軍隊であり、第一段階古代山城の運用をなし得た唯一の動員体系である。城内のみでも広大な面積を有し、城外での部隊展開が必須な古代山城群を軍事的に機能させるためには、百済の役に匹敵する動員数が必要である。

鞠智城と菊池川中流域の地域社会との関係解明を目的とした考古学的研究論文要旨

柴田 亮

本論は、鞠智城と菊池川中流域に所在する遺跡を考古学的手法によって分析することで、9世紀後半から10世紀の地域社会と鞠智城の関係性について論ずるものである。

鞠智城の考古学的な画期のうち、Ⅳ期（8世紀第4四半期～9世紀第2四半期）とⅤ期（9世紀第3四半期～10世紀第3四半期）は鞠智城が倉庫として使用された段階に該当する。菊池川中流域では、8世紀後半頃に集落が急増するが、9世紀前半までにその多くが消滅する。一方、御宇田遺跡群や赤星水溜遺跡など9世紀後半まで存続する遺跡がわずかに存在しており、これらの遺跡からは、特殊な建物配置や墨書土器、初期貿易陶磁器が見つかるなど、官衙や地域内有力者に関連する遺跡であることが想定される。9世紀前半と9世紀後半の時期の境は、鞠智城がⅣ期からⅤ期に移行する期間とおおむね合致していることから、鞠智城Ⅳ期からⅤ期への変化と、菊池川中流域の官衙や地域内有力者の関連遺跡の消長が連動することが予測される。このような視点から、山鹿郡御宇田遺跡群と菊池郡赤星福土・水溜遺跡の考古学的分析を中心に、菊池川中流域の古代集落の動態を鞠智城と比較することで、鞠智城の倉庫群の歴史的評価を試みた。

分析の結果、御宇田遺跡群や赤星水溜遺跡は概ね9世紀後半が主体であり、土器型式などは鞠智城と類似することを確認した。菊池川中流域の9世紀後半頃の遺跡には、御宇田遺跡群のようなコの字型の建物配置を有しているものが含まれている。この時期は肥後で公営田が設置された時期に相当することから、公営田関係者の遺構となる解釈が可能となる。また、鞠智城Ⅴ期の倉庫群は菊池川中流域の公営田関係者が利用した可能性が高いと結論づけた。

菊池川中流域の古代集落の動態は、鞠智城の倉庫群の変遷と有機的に結びついており、これは倉庫群や菊池川中流域が律令制度に基づく国家的な開発事業のもとで成立したことが要因である。律令制度の変容・崩壊とともに鞠智城は廃絶に至ったのである。

「鞠智城と菊池川中流域の地域社会との関係解明を目的とした考古学的研究」発表要旨

柴田 亮

1.本研究の目的

9世紀後半代から10世紀における菊池川中流域の古代集落の消長と鞠智城との関係性、その社会的背景について明らかにすること。

2.分析方法と分析対象

(1)分析方法

9世紀後半頃の集落遺跡を対象として、遺物の悉皆調査を実施。土器の器種組成や遺跡の存続幅を把握後、両遺跡の分析結果を鞠智城の土器分析データと比較。鞠智城と両遺跡の並行関係と出土遺物の共通点と相違点を検証。

〈土師器・須恵器の年代観〉網田 1994a・b、山元 2019
〈貿易陶磁の年代観〉山本編 2000
└─ 準拠

(2)分析の対象

a.御宇田遺跡群(図1)

山鹿郡内菊池川右岸の丘陵上に位置。調査区:妙見I・II地区・虎ヶ迫地区・西久保地区に分けられ、妙見II地区・虎ヶ迫地区のみ遺構配置図あり(野田 1998)。

〈虎ヶ迫地区〉掘立柱建物、竪穴建物群、柵列など

〈妙見II地区〉コの字形の建物配置をもつ掘立柱建物群、土坑など

図1 遺跡分布図(能登原 2014 を改変)

b.赤星福土・水溜遺跡(図1)

菊池郡内、菊池川南岸に発達した扇状地上に位置。福土地区と水溜地区に分けられる(熊本県教委編 1977)。

〈福土地区〉方形土坑群、柱穴、溝

〈水溜地区〉竪穴建物、柱穴、溝

3.分析結果

(1)御宇田遺跡群

〈虎ヶ迫地区〉8世紀中頃〜10世紀前葉までの時期幅であり、主体は8世紀後半頃〜9世紀前半。墨書土器あり。

〈妙見Ⅱ区〉8世紀後半～10世紀前葉までの時期幅であり、主体は9世紀後半頃。9世紀後半～10世紀前葉:墨書土器が13点出土した92土坑、墨書土器2点と越州窯系青磁I類が出土したSK04などがある。遺物数は少ないが、緑釉陶器や円面硯も認められる。

(2)赤星福土・水溜遺跡

〈福土・水溜地区〉8世紀後半～9世紀の時期幅。土師器椀・坏(回転台・手持ちヘラケズリ)、荒尾・宇城産須恵器など。墨書土器や越州窯系青磁(I・Ⅱ類)もあり。

(3)鞠智城の出土遺物との比較

【鞠智城の土器型式】御宇田遺跡群、赤星福土・水溜遺跡と大きな違いは見出せない。

【土器組成】土師器主体・供膳具主体は鞠智城と一致。御宇田遺跡群、赤星福土・水溜遺跡は土師器の甑・甕が一定数出土しており、鞠智城と相違点あり。

【時期別の変遷過程】御宇田遺跡群:10世紀前葉まで遺物が確認されており、鞠智城Ⅳ・V期変遷過程と概ね一致。赤星福土・水溜遺跡:鞠智城V期まで存続しているが、その下限は9世紀後半。

4.考 察

(1)鞠智城Ⅳ・V期における鞠智城の評価

近年の研究では、能登原孝道2014・向井一雄2014・里舘翔大2018・垣中健志2021・岡田有矢2021・藤井貴之2023などがある。

菊池川中流域の開発と生産力向上を背景に、大宰府や国府が成立に関与し、維持・管理についても国家が関わったと指摘する意見が多い。一方、鞠智城周辺の集落との関係性の強さを重視する意見もあり。

(2)9世紀代の菊池川中流域の地方行政

特徴的な政策として〈公営田制〉が挙げられる。

〈公営田制〉財政の危機を克服し歳入を確保する目的で案出された国家経営の田制。弘仁14年(823):大宰大弐小野岑守の建議に基づき、大宰府管内九国における口分田の中から良田を割取して設置。肥後国は嘉祥3年(850)、斉衡2年(855)に営田の継続が申請され、許可。肥後で成功を納め、貞観年間(859～877)まで継続(工藤1997)。

5.結 論

菊池川中流域に8世紀後半頃に出現する遺跡:律令制に基づく国家的な農地開発事業を背景に成立。多くは9世紀前半までに消滅。

9世紀後半以降の集落:コの字型の建物配置を有する御宇田遺跡群や上鶴頭遺跡(熊本県教委編1983)があり、貿易陶磁や墨書土器といった特殊な遺物が出土する傾向。

コの字型の建物配置を有する遺跡の評価:延暦14年(795)院倉分置の格の発布により設置された郡倉の別院と指摘(工藤1983・1997、板楠1988など)。

両遺跡の主要な年代:9世紀後半頃 → 倉分置の格の発布と約50年の開き

9世紀後半は公営田が設置された時期に該当。菊池川中流域の遺跡にコの字型の建物配置が出現する時期と概ね合致。

⬇

御宇田遺跡群や上鶴頭遺跡:公営田の設置に伴い出現した公営田関係者の遺跡とする解釈が可能。赤星福土・水溜遺跡の調査地点ではコの字型の建物配置が確認されていないが、公営田の耕作に携わる庶民の居住域と想定される。

鞠智城V期の倉庫群:菊池川中流域に設置された公営田の関係者が利用した倉庫と想定

9世紀末に受領制が成立し、10世紀代に富豪之輩と呼ばれた地方の有力者に徴税を請負わせる負名体制が成立すると(佐々木2004)、公営田による税収の必要性が減じたことで、公営田経営に関連する集落は自然に消滅。鞠智城の倉庫群も役割を終えたと考えられる。

【参考文献】

網田龍生1994a「奈良時代 肥後の土器」『先史・考古学論究』197−254頁　龍田考古会
網田龍生1994b「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究』X　93−117頁　日本中世土器研究会
板楠和子1988「記録と伝承」『古代熊本の風土と地名』32−36頁　全国地名シンポジウム熊本大会実行委員会
岡田有矢2021「出土遺物からみた平安時代肥後国内における鞠智城の位置付け」『鞠智城と古代社会』第10号1−24頁　熊本県教育委員会
垣中健志2021「地域社会からみた鞠智城―八世紀から十世紀を中心に―」『鞠智城と古代社会』第10号25-44頁　熊本県教育委員会
熊本県教育委員会編 1977『赤星福土・水溜遺跡』
熊本県教育委員会編 1983『上鶴頭遺跡』
熊本県教育委員会編 2012『鞠智城跡Ⅱ―鞠智城跡8～32次調査報告―』
工藤敬一1983「上鶴頭遺跡の性格についての一推論」『上鶴頭遺跡』85−86頁　熊本県教育委員会
工藤敬一1997「古代的世界の解体」『図説 熊本県の歴史』7−174頁　河出書房新書
佐々木恵介二 2004『受領と地方社会』山川出版社
里舘翔太2018「平安時代の鞠智城周辺の国内情勢」『鞠智城と古代社会』第7号　23−42頁　熊本県教育委員会
能登原孝道2014「菊池川中流域の古代集落と鞠智城」『鞠智城跡Ⅱ ―論考編1―』121−139頁　熊本県教育委員会
藤井貴之2023「九世紀における鞠智城倉庫群の基礎的考察」『鞠智城と古代社会』第11号　44−69頁　熊本県教育委員会
松本寿三郎・板楠和子・工藤敬一・猪飼隆明 2012「二章 律令国家の成立と展開」『熊本県の歴史』30−72頁　図書印刷株式会社

向井一雄2014「鞠智城の変遷」『鞠智城跡Ⅱ ―論考編 2―』75−105頁　熊本県教育委員会
山本信夫編2000『大宰府条坊跡XV―陶磁器分類編―』太宰府市教育委員会
山元瞭平2019「古代宇城窯跡群の基礎的研究―須恵器編年を中心に―」『先史学･考古学論究』Ⅶ　219−231頁龍田考古会

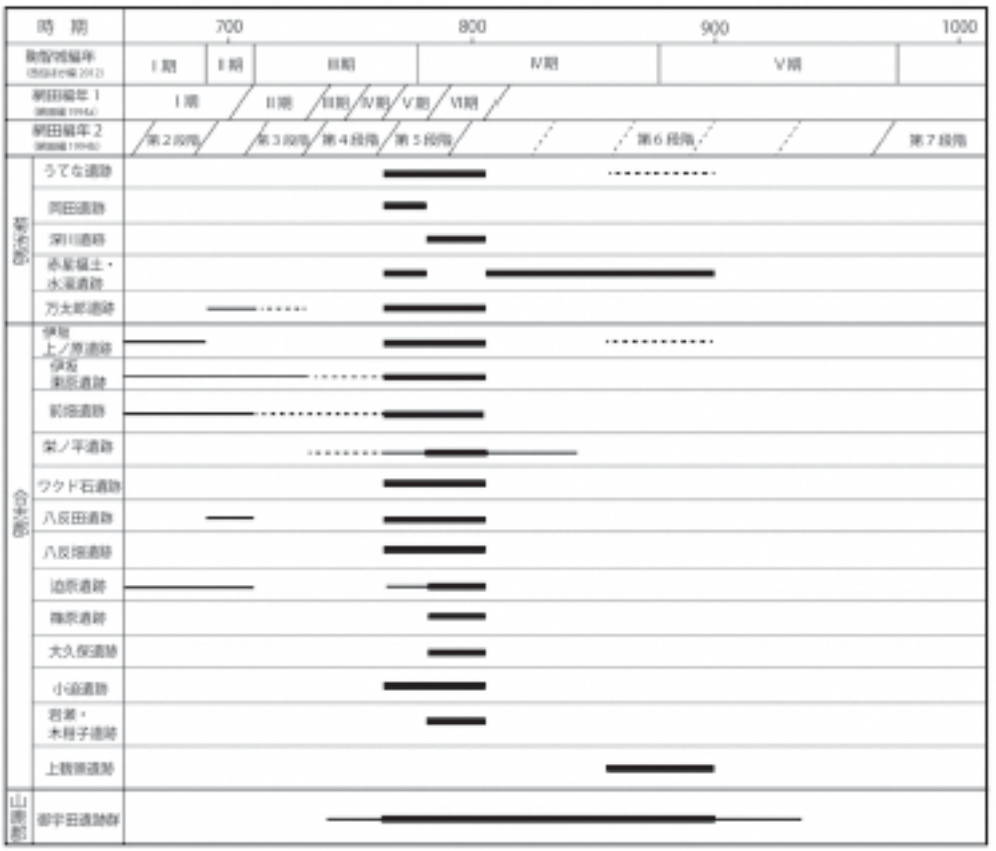


図２ 菊池川中流域の古代集落の時期別消長（能登原 2014 掲載図をもとに筆者作成）

日本古代における山城の支配構造―総領制との関係から

古内　絵里子

本稿は、日本の山城を管理・運営するシステム、すなわち支配構造を論及し、それを踏まえて朝鮮半島と日本の山城の比較を行うことにより古代朝鮮半島の山城が日本の山城に与えた影響を明らかにし、管理・運営という面も含めて、どのようにして日本の古代山城が成立したのかを論じたものである。

まず、七世紀後半の総領制と山城の関係について検討を行い、白村江の敗戦後、国防の危機に際して山城造営・建築情報とともに亡命百済人がもたらした広域管理システムをとり入れて整備したのが総領制・道制であることを指摘した。

ついで、八世紀以降の山城の管理・維持システムを検討し、総領制・道制の停止により山城の管理は国へ移行したが、外敵の脅威が低下したため、その大半は八世紀前半には城としては停止されたことを指摘した。その一方で、西海道では総領から大宰府への移行に伴い、山城の管理も大宰府に引き継がれたことを述べた。このことから、七世紀後半以来の国を越えて山城を管理するというシステムが西海道のみ継続したことを論じた。

最後に、朝鮮半島における古代山城の支配構造の実態の解明を試みた。まず、百済の五方という広域行政区域が軍事的な役割もあったことから、山城の管理にも関わっていたことを指摘した。ついで、新羅の八筥山城木簡から日本の古代山城における米・穀物の保管・管理について検討を行い、日本でも朝鮮半島の山城と同様に長期間保管できる米や随時利用できる米などが分けて保管されていた可能性が想定できることを述べ、朝鮮半島の山城の管理システムを参考に、日本の古代山城の支配構造が整備された可能性があることを指摘した。

したがって、日本は白村江の敗戦後の国防危機に際し、亡命百済貴族の力を用いて山城という防衛施設を導入するにあたり、建築構造というハード面とともに、百済の広域軍事・行政区域である「方」という管理・維持システムというソフト面もとりいれたと考えられる。そして、孝徳朝に形成された総領制に百済の軍事・行政システムである五方の情報をとりこみ整備したものが、総領制・道制であり、これをもとに七世紀後半の日本では古代山城の管理・運営が行われていた。以上から、日本の古代山城は、山城の構造・建築技術のみならず、その管理・運営システムというハードとソフトの両面から朝鮮半島の山城を継受したものであったといえる。

日本古代における山城の支配構造
―総領制との関係から―

福山大学　古内絵里子

はじめに

白村江の敗戦後に、多くの山城が造営された天智朝では、亡命百済貴族の力をかりて近江令や庚午年籍など新たなシステムを導入した。古代山城も亡命百済貴族の指揮のもとで作られ、日本の古代山城は朝鮮半島の山城と構造の類似性が指摘されている。この事実を踏まえれば、山城を管理・維持するシステムも朝鮮半島のものを取り入れて整備した可能性が想定できる。そこで、七世紀後半の総領制と山城の関係について検討を行い、日本の山城の支配構造を明らかにする。ついで、八世紀以降の山城の管理・維持システムを論及する。そして、古代朝鮮半島における山城の支配構造を検討し、朝鮮半島の山城の管理・運営システムが日本の管理・維持システムの成立に与えた影響を解明し、ハードとソフトの両面から日本の古代山城の成立を明らかにする。

1. 七世紀後半における古代山城の管理

(1) 古代山城の施設

史料1『日本書紀』天智八年(669)是冬条

修_**高安城**_、収_**畿内之田税**_。

史料2『日本書紀』天武元年(672)七月壬子(23日)条

坂本臣財等、次_于平石野_。時聞_近江軍在_**高安城**_而登之。乃近江軍、知_財等来_、以悉焚_**税倉**_皆散亡。

史料3『日本書紀』天智九年二月条

又修_**高安城**_、積_**穀与**_レ**塩**。

史料4『続日本紀』大宝元年(701)八月丙寅(26日)条

廃_**高安城**_。其**舎屋、雑儲物**、移貯_于大倭・河内二国_。

『類聚三代格』巻一八器仗事所収、貞観十二年(870)五月二日太政官符
『延喜交替式』一五七条

→大宰府司の交替時に大野城の器仗の点検と修理を行うことが定められている。

史料5『日本三代実録』元慶三年(879)三月十六日丙午条

肥後国**菊池郡城院兵庫**戸自鳴。

史料6『続日本紀』文武二年(698)五月甲申(25日)条

令=大宰府繕=治大野・基肄・鞠智三城_。

史料7『続日本紀』文武三年十二月甲申(4日)条

令=大宰府修=三野・稲積二城_。

・城内には稲倉、穀・塩倉、兵庫などが置かれていた(史料1～5)。
・史料6 史料7の修繕記事から、山城を管理・運営する体制が存在

(2)総領制と山城

○総領と山城…総領が置かれていた地域と古代山城が設置されていた地域が一致

【畿内】

・高安城は天智八年に「畿内」の田税を収納(史料1)

→軍事および財政上の必要から一国単位の行政よりも広域の権力が存在

・高安城の「雑儲物」(史料4)

周芳惣領所と筑紫大宰へ「儲物用」の送付例があり、「畿内」においても同様に大宰総領が軍事物資の運用権限を有していた。

⇩

高安城は国ではなく畿内という広域で管理されていた。

【筑紫】

大宰府が大野城・基肄城・鞠智城・三野城・稲積城を修繕(史料6 史料7)

→筑紫総領が西海道の山城を管理

【瀬戸内海地域】

『日本書紀』持統三年(689)八月辛丑(21日)条

→伊予総領に詔をして、讃岐国御城郡で獲えた白燕を放し養いにせよと命じた。

・伊予総領が讃岐国の行政に関しても権限を有していた。

・讃吉国山田郡には屋嶋城があり、伊予総領が伊予国と讃岐国の山城を管轄していた可能性が考えられる。

○総領が管轄した広域行政区と「吉備道」木簡

①藤原宮3―1488号木簡

・□□□□吉備道道
〔備道ヵ〕

(154)×(11)×1　081

②藤原宮1―82号木簡

・**吉備道中国**浅口評神部

(169)×(11)×4　081

③飛鳥藤原京1―107号木簡

・**吉備道中国**加夜評

・葦守里俵六□

111×24×3　　031

「吉備道」は国を越えた「道」という広域行政区画と考えられ、国を越えて管理を行う総領制と共通する。吉備道は吉備総領が管轄した広域行政区画と考えられる。

⇒総領と総領が管理する広域行政区画―「道」

『常陸国風土記』に「惣領」とみえることから、総領制は孝徳朝に開始したと考えられる。そして、白村江の敗戦後、国防の危機に際して山城造営・建築情報等とともに亡命百済人がもたらした広域行政システムの情報を入れて整備したのが総領制・道制と考えられる。

2. 八世紀以降における古代山城の管理

(1)畿内・瀬戸内海地域

西海道以外の地域では、総領制および道制から国制へ移行するに伴い、山城の管理も国に移った。

史料8『続日本紀』大宝元年八月丙寅(26日)条

廃_高安城_。

史料9『続日本紀』養老三年(719)十二月戊戌(15日)条

停_備後国安那郡茨城・葦田郡常城_。

総領制・道制の停止により山城の管理は国へ移行したが、外敵の脅威が低下したため、西海道を除き、その大半は八世紀前半には城としての機能が停止

(2)西海道

八世紀前半において西海道で存続が確実な古代山城は、大野城・基肄城・鞠智城

史料10 大宰府政庁跡不丁地区出土木簡

・為班給筑前筑後肥等国遣基肄城稲穀随大監正六上田中朝□[

264×34×6　011

大宰大監である田中朝臣が基肄城の稲穀を筑前・筑後・肥(前・後ヵ)などの国に班給させた事が記されている。

→奈良時代の基肄城は大宰府が管理

史料11『万葉集』巻8―1472首

（前略）

右、神亀五年戊辰、大宰帥大伴卿之妻大伴郎女遇レ病長逝焉。于レ時、勅使式部大輔石上朝臣堅魚遣二大宰府一、弔レ喪并賜レ物也。其事既畢、駅使及府諸卿大夫等共登二記夷城一而望遊之日、乃作二此歌一。

・神亀五年（728）に大宰帥大伴旅人の妻大伴郎女が病死したため、朝廷は式部大輔石上堅魚を大宰府に派遣

・府官が都からの特別な使者である堅魚を肥前国の基肄城で歓待

→大宰府が西海道の山城を管理

筑紫総領の後身として西海道七国三島を総括したのが大宰府であり、総領から大宰府に移行したことに伴い、西海道の山城の管理も大宰府に引き継がれた。

3. 朝鮮半島における古代山城の管理

（1）朝鮮の古代山城と木簡

大邱・八筥山城

七世紀半ば頃は近隣地域の監視および統制のための拠点の城

八筥山城木簡

麦・稲・米などの穀物に関する物

史料12 八筥山城15号木簡

×□村王私禾□□□□〔之カ〕

192×32×9

・「禾」は穀物の穂を意味するとみられ、精米する前、精米した後など多様な形で穀物が利用

・用途や保管期間によって区分して穀物を利用したのは山城が軍事・行政的な拠点であったため。【全2004】

○日本の古代山城における米・穀物の保管（史料1～4、史料10）

史料13 鞠智城跡1号木簡

・秦人忍〔米ヵ〕□五斗

134×26×5　032

・日本の山城も新羅の八筥山城木簡にみえるように長期間保管できる米や随時利用できる米などが分けて保管されていた。

・山城の構造や造営技術だけでなく、山城の管理・運営システムも朝鮮半島のものを参考に整備

(2)朝鮮半島の古代山城と広域行政

○新羅の地方統治

州―郡―城・村の州郡制

州、郡、城・村には、それぞれ軍主、幢主、道使と呼ばれる地方官が中央から派遣。また、州は広域の軍管区・監察区でもあった。【鄭2019】

○百済の地方統治

方―郡―城・村制

史料14『周書』巻四九、百済伝

都下有二萬家一、分為二五部一、曰二上部、前部、中部、下部、後部一、統二兵五百人一。五方各有下方領一人、以二達卒一為上レ之。郡将三人、以二德率一為レ之。方統二兵一千二百人以下、七百人以上一。城之内外民庶及餘小城、咸分〔隷〕焉。

史料15『翰苑』蕃夷部、百済伝

又有二五方一、若中夏之都督、方皆達(恩ヵ)率領レ之。毎レ方管レ郡、多者至レ十、小者六・七郡。郡将皆恩率為レ之。郡縣置二道使一、亦名城主。

・百済は全国を五つの方に分け、各方には方領(長官)、方佐(次官)が派遣され、700～1200人の兵卒を統率
・方は六～十郡を管轄
・五方という広域行政区域は、軍事的な役割もあり、百済の山城の管理にも関わっていた可能性が想定される。

『続日本紀』文武四年六月庚辰(3日)条では、竺志惣領により肥人たちを従えて覓国使刑部真木らを剽劫した薩末比売らが処罰されている。

→筑紫総領が筑紫に対して行政だけでなく軍事的権限も有していた。

⇩

行政と軍管区という両面を持つ百済の五方と総領・道制は共通性がある

おわりに

(1)白村江の戦い以降、西海道、瀬戸内海沿岸に山城が設置され、天智朝以降にその地域に総領がみえることから、山城と総領制は連動したものと考えられる。

(2)山城という防衛施設を導入するにあたって、建築構造というハード面とともに、朝鮮半島の広域軍事・行政を模倣した管理・維持システムというソフト面も取り入れた。

(3)『常陸国風土記』にみえるように孝徳朝から総領制があったが、白村江の敗戦により国防危機に陥った際、その総領制に朝鮮の軍事・行政システムである方制をとりこみ整備したものが、総領制・道制

【参考文献】

・岩本健寿「吉備三国の国名表記と大宝令」(『史観』161号、2009年)
・狩野久「古代国家の発展と吉備」(『岡山県の歴史』吉川弘文館、2000年)
・狩野久「山城と大宰・総領と「道」制」(『永納山城跡』西条市教育委員会、2005年)
・甲元眞之「鞠智城についての一考察」(『青驪』3号、2006年)
・酒井芳司「筑紫大宰と筑紫総領―職掌と冠位の再検討―」(吉村武彦編『律令制国家の理念と実像』八木書店、2022年)
・坂上康俊「律令制の形成」(『岩波講座　日本歴史』第3巻、古代三、岩波書店、2014年)
・坂上康俊「令制大宰府成立前史―総領と大宰―」(九州歴史資料館編『大宰府史跡100年記念シンポジウム「律令国家と大宰府史跡」～平城京・大宰府・多賀城』福岡県教育委員会、2021年)
・全京孝(橋本繁訳)「大邱・八筥山城木簡の紹介」(『木簡研究』45号、2023年)
・鄭東俊「『翰苑』百済伝所引の『括地志』の史料的性格について」(『東洋学報』92号、2010年)
・鄭東俊「朝鮮三国の地方行政機構とその構成」(『古代東アジアにおける法制度受容の研究―中国王朝と朝鮮三国の影響関係を中心に―』早稲田大学出版部、2019年、初出2016年)
・仁藤敦史「広域行政区画としての大宰総領制」(『国史学』214号、2014年)
・橋本繁「城山山城木簡と六世紀新羅の地方支配」(『韓国古代木簡の研究』吉川弘文館、2014年、初出2009年・2013年)
・三上喜孝「城山山城出土新羅木簡の性格―日本古代の城柵経営との比較から―」(『国立歴史民俗博物館研究報告』194集、2014年)
・高松市教育委員会編『屋嶋城跡Ⅱ』史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅱ(高松市教育委員会、2008年)

鞠智城跡「特別研究」発表要旨集

第12回 鞠智城跡「特別研究」成果報告会
発表レジュメ集

令和6年（2024年）3月10日　発行
編　集　歴史公園鞠智城・温故創生館
〒861-0425　熊本県山鹿市菊鹿町米原443－1
発　行　熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本県熊本市中央区水前寺6－18－1
印　刷　株式会社アド・コム
〒862-0908　熊本県熊本市東区新生２丁目23-18

発行者：熊本県教育委員会
所　属：装飾古墳館
発行年度：令和5年度
（2023年度）

この電子書籍は、第 12 回 鞠智城跡「特別研究」成果報告会 発表レジュメ集を底本として作成しました。

底本は、令和 5 年度（2023 年度）鞠智城跡「特別研究」成果報告会の発表レジュメ集として令和 6 年（2024 年）3 月 10 日に会場（熊本大学工学部百周年記念館）で参加者に配付されました。

書名：第 12 回 鞠智城跡「特別研究」成果報告会 発表レジュメ集
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦 2024 年 3 月 20 日